



特集号「水枯れの信濃川・千曲川に鮭の道を拓く」

巻頭言：信濃川水系のサケを存続するために我々が出来ること

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所研究員 飯田 真也

■ 発眼卵放流の効果

発眼卵放流は、発眼卵を人為的に河床に埋設し、以後の生育を自然環境にゆだねる増殖手法です。

サケ属魚類の発眼卵は、物理的な衝撃に強く、短期間であれば大気中でも生育することが可能なため、稚魚に比べて運搬が容易です。

よって、発眼卵放流は省コストで簡便な増殖事業として、世界中で実施されています。



千曲川支川浦野川での発眼卵河床埋設

発眼卵放流の効果、すなわち発眼卵が稚魚に至る生残率（以下；生残率）については、今まで多くの研究が行われ、サケについては平均 90% 程度であることが確かめられています。

ただし、放流する河床環境については注意が必要です。

放流した発眼卵および仔魚は、砂利の隙間を流れる浸透水に含まれる酸素を使って呼吸します。細かな砂が多い河床は、砂で隙間が目詰り浸透水が少なく、卵・仔魚は酸欠によって死んでしまいます。

よって、発眼卵放流を効果的に実施するためには、細かな砂の少ない河川、河床を選んで行うことが重要です。

新潟水辺の会の皆様による発眼卵放流は、適切な河床環境を選択していると思います。よって、2

万粒の発眼卵放流により、約 1.8 万尾の稚魚が生産されると推定します。

これら発眼卵放流群が親魚になって再び河川へ戻ってくる割合（以下；回帰率）は注目されるのですが、残念ながら殆ど明らかになっていません。本州日本海地区では、稚魚放流群の回帰率は約 0.3% であると報告されています。

しかし、ふ化場および発眼卵放流を起源とするサケ稚魚について、両者の遊泳能力を比較したところ、前者に比べ後者が優れることが確かめられました。遊泳力は捕食者からの回避能力に直結しますので、発眼卵放流群の回帰率はふ化場群に比べて高い可能性が示唆されます。

■ 信濃川水系におけるサケ増殖事業の展望

近年、人工ふ化放流事業が生態系に及ぼす負の影響が指摘され、資源管理と生態系保全両方の観点から野生サケ（自然産卵由来）を保全することが強く求められています。

具体的な負の影響とは、遺伝的多様性や子孫を残す能力（適応度）の低下です。ふ化放流事業における人工受精では、雌雄の使用率が異なり、雌：雄 = 10:3 程度で行われます。

よって、ふ化場魚は、自然交配（雄雌一対）を由来とする野生魚に比べて遺伝的多様性が劣ることが容易に想像されます。

では、なぜ遺伝的多様性が重要視されるのか？

それは、生物が地球温暖化等の環境変化に適応していくために最も重要なソースだからです。

これは、ふ化放流事業を否定するものではありません。今後は、気候変動やふ化場魚と野生魚が交雑する影響を考慮し、野生魚を保全することを基盤とした生態系ベースの資源管理にも配慮することが求められているのです。

では、野生魚を保全するために我々は何が出来

■水辺レポート

るのでしょうか？

例えば、水力ダムは河川生態系に大きな影響を与えることが指摘されています。

放水量に伴って河川水位が季節的に変化すると、冬期には水が流れない場所へサケが産卵してしまい、それらは凍結や酸欠によって死んでしまいます。

そのため、野生サケの保全に関して先進的な北米では、ダムの放水量はサケの産卵生態に十分配慮した上で決定されます。

また、近年では河床に粒径2mm以下の細かな砂（以下；細粒土砂）が堆積する細粒土砂汚染が、アジアを中心に問題となっています。細粒土砂汚染の原因は、森林伐採や農地化等、多岐に渡ります。

前述のとおり、河床に細粒土砂が堆積した場合、浸透水量が低下し、産卵床内の致死率が增大します。よって、細粒土砂汚染の発生は、自然産卵を由来とする野生サケに致命的な影響を与えかねません。

新潟水辺の会や各団体の皆様が行う精力的な発眼卵・稚魚放流によって、宮中ダムのサケ捕獲数は飛躍的に増大し、今年度は736尾となりました。

また、捕獲した親魚の年齢構成データを分析した結果、次年度はさらに増加することを予測しています。

信濃川水系のサケ資源を持続的に維持していくために、今後は野生サケの保全にも目を向けてはいかがでしょうか。



川で自然産卵するサケ

そのためには、ふ化放流サイドだけでなく、農業・林業・発電等、信濃川に携わる多くの機関が包括的な河川環境の改善を推進し、良好な産卵環境の維持に努めることが肝要であると考えます。

report
信濃川・千曲川へ、
鮭の遡上を夢見ての9年間

平成18年12月7日クロスパルにいがた（新潟市中央区）にて「水辺シンポジウム」が行われ、当会会員の森民夫・長岡市長、同 篠田昭・新潟市長をパネリストに迎え、「上流長野まで鮭の遡上できる信濃川」が行われました。

これは石月 升前副代表が以前より提案していた「信濃川・千曲川へ鮭を戻す」夢の第1歩の始まりで、今年で9年が過ぎました。



平成18年12月7日クロスパルにいがたでのシンポジウム

■鮭と信濃川・千曲川

「鮭」は、全国的に「^{ぶり}鮭」と並ぶ“年取り魚・食文化”であり、西の「鮭文化圏」に対して、越後以北を「鮭文化圏」と称し、かつてどこの河川でも鮭が遡上し、流域に住む人々は、遡上する鮭や鱒などの魚を食べ、川と密接な関わりを持っていました。平安初期に書かれた「延喜式」には、信濃国より大和朝廷へ多くの鮭が献上されたとあります。鮭は、食べ物や文化だけでなく、海の栄養素を山に運ぶ重要な担い手でしたが、それが無くなり、山や森の機能が減少しているとも言われています。

かつての千曲川は、秋になると多くの鮭が遡上する自然豊かな川でした。長野県の統計では、鮭の漁獲量が昭和初期（1933年頃）に年間10t～70t（約3,000～20,000尾）を記録していましたが、昭和10年代に始まった国策の電源開発による河川の水枯れなどで鮭の遡上量は激減し、昭和20年には漁獲量を示すデータが消えました。

その後、長野県では昭和55年から21年間、県民を挙げて「カムバックサーモンキャンペーン」（899万尾の稚魚放流と西大滝ダム魚道改修）に取り組みましたが、21年間で西大滝ダムまで戻った鮭は僅か48尾でした。

昨年6月、松本市立博物館で80年前の昭和9年11月15日、信濃川河口から290km上流の奈良井川で捕獲された鮭2尾（54cm、63cm）を見学しました。

この2尾の鮭は日本最長の遡上距離を誇るだけでなく、遡上時期を考える上で大きな出逢いでした。

これまで信濃川に遡上する鮭は遡上の中心が10月頃になる前期遡上系統群と言われてきましたが、11月中旬に松本で捕獲されていたことから後期系統群の遡上が確認され、信濃川・千曲川が大河にふさわしい自然豊かな川であったことが再発見できました。

■ 鮭復活のための助成金申請

平成18年4月、独立行政法人 地球環境基金より3年間の助成を受けて、新潟県内の鮭の遡上する河川調査、信濃川、千曲川の河川物横断と魚道の調査、河畔林調査、鮭遡上シンポジウム、鮭稚魚放流を行ってきました。

石月さんはその先頭に立って、毎週十日町、飯山の調査や長野の団体との打合わせに奔走してくれました。

平成21年、三井物産環境基金より3年間の助成を受けて鮭稚魚放流や調査、講演などに取組んできました。



放流出口にネットを張り、発電タービン通過後の鮭稚魚を捕獲

長野県での「カムバックサーモン」が打ち切られた最大の理由に、「放流された鮭の稚魚が、発電用タービンに吸い込まれて殆ど死滅してしまい、教育上好ましくない」と言うものでした。では本当に鮭の稚魚がタービンに巻き込まれたとき全て死滅するのか?それを検証するために、新発田市の加治川上流にある赤谷電工発電所を使い、鮭稚魚のタービン通過生存調査を3年間試験しました。

このタービンは通過の生存条件が過酷と言われる横軸でしたが、通過した稚魚の半数は生きていることが証明できました。一方、東京電力とJR東日本の発電タービンは共に縦軸であることから、そこを通過した稚魚の生存率は更に高くなるであろうと推察しています。

平成22年より、信濃川・千曲川・犀川の河川環境を見て自ら考える「信濃川環境大河塾とワークショップ」が始まり、千曲川の源流や奈良井川の源流を訪ね、今年は第6回目を迎えます。



第1回信濃川大河塾の野沢温泉村民宿でのワークショップ

平成9年、これまでの河川法の治水、利水に環境が加わり、これを受けて「信濃川中流域水環境改善検討協議会」(大熊代表がこの委員として参画)が設けられました。長い間の議論の末、減水区間の水量回復が見込まれたことから、当会では自然豊かな川指標の一つである鮭の遡上を象徴として、平成19年から8年間に約166.5万尾の鮭稚魚を、流域の市民と共に「市民環境放流」と銘打って、信濃川水系に放流してきました。

これらにより平成22年10月20日、実に65年振りに信濃川の河口より254km上流の上田市の千曲川にある中山ヤナ場に、体長60cm、体重1.6kgのメス鮭が発見されました。その2年後、平成24年11月13日、同じヤナ場に体長56cm、体重1.7kgのオス鮭が発見され、信州の方々の関心の的となりました。



平成22年10月20日、65年ぶりに上田市で発見された鮭

さらに、平成24年、三井物産環境基金より再度3年間の助成を受けて、千曲川へ鮭発眼卵河床埋設放流、シンポジウム、児童発表会、信濃川環境大河塾の実施、長野県内の小学校に発眼卵からの育成を働きかけ、栄小学校を始め5つの小学校で発眼卵から稚魚への生育観察が行われ、大きくなった稚魚を千曲川に放流しています。

平成26年は十日町市の宮中取水ダム(JR東日本)で、戦後最多の736尾の鮭遡上を確認(9/11~11/10)できました。12月になっても、宮中取水ダムから約5km

■水辺レポート

下流の姿橋下で遡上する多くの鮭を確認できましたので、信濃川中流域には1000尾を超える鮭が遡上したと考えられ、鮭の遡上する信濃川は甦りつつあります。しかし今年、西大滝ダムを越えた鮭は8尾に終わりました。

2009年からの鮭の遡上数の推移

	宮中取水ダム	西大滝ダム
2009年	160尾(♂97, ♀63)	2尾(♂1, ♀1)
2010年	146尾(♂96, ♀50)	3尾(♂2, ♀1)
2011年	135尾(♂93, ♀42)	35尾(♂22, ♀13)
2012年	297尾(♂163, ♀134)	12尾(♂8, ♀4)
2013年	408尾(♂290, ♀118)	6尾(♂3, ♀3)
2014年	736尾(♂465, ♀271)	8尾(♂6, ♀2)

私たち新潟水辺の会は、信濃川源流長野への鮭の遡上を目指し、西大滝ダムの現在の維持放流量の運用について東京電力に“変動放流方式”を提案しています。現在の年間一定の維持放流量 $20\text{m}^3/\text{s}$ を、冬場に維持放流量を少なくし、その分鮭稚魚の降下や親魚の遡上に必要な時期に必要な放流量を流す、それも電気をあまり使わない夜間を中心川に多目に放流することにより鮭の遡上を促す、いわゆる変動放流式です。

今後は千曲川の水で育った稚魚の放流、鮭発眼卵の河床直まき埋設などで千曲川を、『鮭のいる普通の川』に甦らせたいと考えています。

■発眼卵の直まき放流

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 研究員の飯田真也さんより技術指導を受けて現在鮭の発眼卵河床埋設を行っています。実は、9年前のシンポジウムでもその提案が出ていました。当時の知識や技術では直まきの効果は不確かでしたが、現在のやり方を毎年改良しながら継続すれば千曲川への鮭の遡上は可能であると信じています。

9年前も、この活動の成果が実るのは30年後であろうと言われていました。活動の主体が長野県となった今、私たちの活動が大きな曲がり角に来ています。これからも自然を相手にしていることを忘れないで10年目を迎え、千曲川流域の地元の方々が主体で頑張れるように、支援連携をさせていただきます。

世話人 加藤 功

report 通船川・河口の森に トイレが完成!

前号「新潟水辺だより88号」では、通船川の河口の森に、河川敷を占用して寄付金で舟小屋が完成したことをお伝えした。これによって我われの親水活動も新潟市立万代高等学校端艇部の部活動も大変やり易くなったのであるが、もう一つ困ったことがあった。それはトイレが近くなかったことである。



トイレ（左手前）と舟小屋

この状況に新潟市が敏感に反応してくれて、写真のようなトイレが新潟市東区建設課によって設置され、2014年8月1日から供用開始されているのである。

この河口の森には、上下水道も電気も敷設されておらず、汚水を通船川に流すわけにはいかないので、水使用を最小限に抑える水洗汲み取り式として、電灯はソーラー発電を利用することになった。このトイレの維持管理は我われ新潟水辺の会が新潟市から依頼を受け行っているが、万代高校端艇部の部員にも水運びや清掃を手伝ってもらっている。

今までの新潟県新潟地域振興局地域整備部による栈橋・照明灯・駐車場の整備と相まって、河口の森がカヌーを恒常的に楽しめる空間となったのである。2015年夏期には、新潟水辺の会としては万代高校端艇部OBなどの協力を得ながら市民向けのカヌー教室を開催したいと考えている。このカヌー教室は、基礎的な練習から阿賀野川・信濃川などへの遠征を含め、水辺の楽しさが身体にしみ込むように数回行い、いわゆる「川ガキ」を数多く育成することを目的としたい。

なお現在、カヌーを増艇するために、またもやカヌー寄贈をお願いするキャンペーンを行っており、すでに6艇の申し込みがあることをお伝えしておきたい。

代表 大熊 孝

鮭稚魚発眼卵の河床直まき埋設放流について

我われは、2007年から地球環境基金や三井物産環境基金からの助成を受けて、鮭稚魚の市民環境放流を行ってきた。その成果は加藤功さんから別稿で報告されている通りである。

その鮭稚魚は、信濃川中流で放流するものは新潟県中魚沼漁業協同組合から供給を受け、千曲川で放流するものは千曲川水系の水で育てた稚魚にしたいということで、発眼卵を能代川サケ・マス増殖組合に求め、それを長野県木島平村の持田養魚場まで搬入し、孵化してもらったものである。

しかし、単に稚魚を放流するだけでなく、できるだけ自然に近い産卵・孵化ということを希求したいということで、受精した発眼卵を河床に埋設して自然な孵化を試みることにした。発眼卵は直径5mmぐらいで、重さは約0.25gであるが、綿布などで湿度を保っていると比較的安定しており、数日であれば宅急便で送ることも可能という、大変扱いやすいものでもある。発眼卵は孵化するまでに積算温度で480℃が必要と言われている。積算温度とは水温と日数を掛けたもので、例えば日平均水温が5℃あれば、孵化するまでに96日かかるということである。



写真1 発眼卵を入れたバイバードボックス(白い小箱)



写真2 浦野川で発眼卵の河床直まきの様子
(信州大学学生の田岡さん八木さんが手伝ってくれた)

そこで2012年には写真1にある小箱に入れて千曲川支川の浦野川(上田市)に埋設した。この小箱は、バイバードボックスと呼ばれるもので、虫かごのようにスリットがある。しかし、このスリット幅はイワナ用で3mmであり、鮭稚魚はおおむね3.5mmぐらいで、うまく箱から抜け出せなかった稚魚が多かったようである。

2013年には、加藤さんの工夫で、100円ショップでカゴを購入して手製のボックスを作ってみたが、大きすぎて流水の抵抗を受け流されるものが多かった。

このバイバードボックスによらない方法として、日本海区水産研究所の飯田真也氏から図1のように砂利層の河床に直接埋設する方法を教えてもらった。

そこで、2014年12月には上記の浦野川と千曲川支川の裾花川(長野市)で、合計3万粒の発眼卵を直接河床埋設してみた。写真2がその浦野川での作業風景であるが、実は砂利が少なく、用意しておいた砂利をかなり撒き出して、大きな岩影を利用して砂利が流されないように工夫して産卵床をつくった。

これでうまくいったかどうかは、孵化する頃を見計らって、現地調査に赴く予定である。

代表 大熊 孝

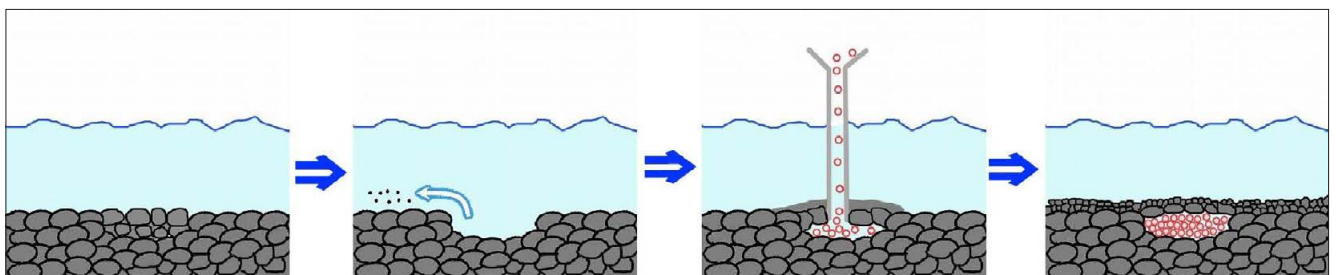


図1 発眼卵の河床直まき埋設方法

新漁業振興法を“大河復活法”と読み替えて

■ 11.22 鮭シンポジウムイン長野に 42 名参加

晩秋の11月22日(土)、水辺シンポジウム2014を長野市安茂里公民館で『鮭の川』をテーマに、長野県漁業協同組合連合会・信州水環境マップ・ネットワーク共催で開催した。新潟から15名、長野から長野大学や信州大学の学生を含め27名で、計42名参加した。



長野でのシンポジウム講演者とパネリストの方々

チラシのように「信州の鮭文化」を語りあった。最初に加藤功信濃川事業部長から現在の活動の到達点と課題が報告された。

基調講演では、安茂里公民館の宮下健司館長から信州での「鮭と長野人とのかかわり」、長野県漁業協同組合連合会の藤森貫治会長から昨秋10月公布の「内水面漁業振興法の果たす役割」が話された。それぞれ、古代から現代に至るサケ・マスの食文化、産業文化、物語等の歴史話、「新法」での内水と海水を往来する回遊魚の持続的な利用のための増殖支援義務、即ち全ての河川横断施設に魚道設置義務が生じる話など。短い講演ではもったいない重要なキーワードを両講師から頂いた講演でした。

引き続き、パネルトークでは、長野県議会議員で長野県水と緑の会今井正子会長と長野大学3年生の北村幸秀魚部部長が加わり、『信州のサケの未来を語る』をテーマに会場参加者からも想いを引き出し、今後の取組について議論が交わされました。

■ 新漁業振興法を“大河復活法”と読み替えて

9年間2つの環境基金からの助成を受けて取り組んできたが、最終年の課題は2つ。1つは鮭の市民事業

の進化。2つは活動持続の人材、組織、仕組づくり。前者は、流域の各漁協や学校協力での「稚魚放流」から、長野大学などの協力で進めている産卵、孵化、降下、遡上の自然回帰をねらいとする「発眼卵河床直埋設」(別紙報告参照)への活動進化である。後者は流域それぞれの地元でまだ未知数な活動継続の受け皿探しである。

その視点でシンポジウムを報告する。

鮭の市民事業の今後は、上流に遡上する鮭の数が少なく、まだまだ人の手による活動が必要であることが確認された。一方、流域で遡上した鮭の遡上、降下に不可欠な「魚道の設置義務」が今後、河川管理者などに出てくるという。そのため『内水面漁業振興法』を“大河復活法”と読み替えて活用できるかが、今後の活動の大きなテーマになるだろうとイメージできたシンポジウムでした。

《新『内水面漁業振興法』の概要抜粋》

【24条】サケ・マスなどの回遊魚類の増殖の取組むのために、必要な措置。【15～19条】漁業環境再生での“魚道の整備と維持管理”、“産卵場の造成”。【13条】外来魚・害鳥対策など生態系の保全、自然共生にかかる河川整備。回遊魚の持続的な利用。【4～6条】振興計画を漁連と県、国が作成し、承認後。【7、8条】国が必要な措置と予算化する。

文字通りだとすると、信濃川、千曲川水系で魚道の無いダムや維持流量の無いダムが無くなり、サケ・マスなど遡上、自然産卵・孵化、降下のための必要最小限の改善が各ダムや横断工作物、取水施設などでとられる大河復活の未来像が想像できる。

また、受け皿を育て、支援し、協働する大河流域プラトホーム(流域の産・官・学・民の協議組織)構想に着手する時期になっている。

今後の活動の受け皿づくりでは、稚魚が3～5年後に母川に帰るように、発眼卵育成放流の学校と児童・保護者、発眼卵埋設を実践する大学と大学生、NPO団体などの支援プログラムや大河塾で向学心のあるリタイア高齢者などの巻き込みが課題になるだろうと思われる。

副代表 相楽 治





report

06

「信濃川大河塾」ツアーへの参加を期待して

この「大河塾」の名称について、周りの方々に尋ねたところ「長江や黄河などを学ぶ塾?」との答があったが、多くは「信濃川、江戸川・・・」との答であった。さすがにナイル川やドナウ川と答える人はいなかった。アフリカやヨーロッパは遠い国のようである。私が6年ほど前、中国との橋梁技術交流で中国の方との会話で、中国では川の大きさを表すに4つの言葉があるとのこと。天空から流れ下って地の底まで流れる川を表すのが「江」、次に長い川が「河」、次に「水」と表し、最も短い川を表す言葉が「川」であるとのこと。とすると日本の川は、中国流でいうと全て短い川になってしまうねと「川」で意気投合し、杯を酌み交わしたことを思い出す。

■ 水辺のままの大河を感じる「大河塾」ツアー



犀川平ダム下流の無水区間

があり、川と言えない水路と化していたのだ。

長野県の人に聞くと、その状況が当たり前であるとのこと。かつての十日町市の水無し信濃川と同じ光景である。下流域の新潟県はじめ全国の方々はその状況すら知られていない実情が分かった。そこで長野県内や全国の方々からこの実情を知ってもらい、本来の川のあり方について認識を深めてもらおうと企画したのが、流域源流を現地再発見ツアーで辿る「大河塾」である。

初めころは長野県民と信濃川の発電で山手線を動かしている東京都民から知ってもらおうつもりでいたが、PR不足もあり、それらの参加者数が2~3割で7~8割が新潟からの参加者で占められた。そこで、まずは下流域の新潟県民が信濃川の上流地域がどのような状況になっているのかを知って、長野や東京をはじめ全国へ発信してもらおう方がよいのではないかと考え、近年は主に新潟県内を対象にPRしている。またダムや発電所見学だけでなく道中の長野県内流域の歴史文化などさまざまな場所を訪ね学び楽しむツアー塾として充実を図っている。



三川（穂高川・高瀬川・犀川）合流部の説明

初めの1,2回目は、ダムや発電所を中心に見学するツアーで、参加者によるワークショップを開催。第3回は十日町市の大地の芸術祭見学を織り込んだツアー。第4回は千曲川沿いに走る飯山線や日本最高標高を走る小海線とバスを乗り継ぎ、信濃川・千曲川の源流を徒歩で訪ねるツアー。昨年の第5回は国の重要文化財に指定されている牛伏川の砂防施設「フランス式階段工」や南木曾町の土石流現場視察などを地域の方から解説ガイドを聞くことができ、「川の恵みといたみ」を学ぶツアーになった。

この「大河塾」は毎回、宮中ダム、西大滝ダム見学に際しJR信濃川改善事務所と東京電力信濃川電力所の皆様から案内と説明でお世話になっている。

ツアーの最後に参加された方から感想をもらうと、「土石流現場を初めて見ることができ、被災地が想像以上の厳しさに胸が痛みました」、「この塾で環境、エネルギーなど広範囲な川と人との関わりを知りました」、「大熊先生からの分かり易い説明で、学ぶことの楽しさ、幸せを感じました」など多くの「川発見」が寄せられた。

今年も企画予定しているので皆様の参加をお待ちしています。

副代長 山岸 俊男

新潟水辺イベント情報

○新潟の水辺を見つめなおす映画の勉強会

NPO 法人 新潟水辺の会が発足して 28 年になります。発足のきっかけとなった「柳川堀割物語」を鑑賞し、もう一度「水辺とは何なのか、私たちの進んでいる道はこれでよいのか?」を見つめなおす機会にするための勉強会を行います。

終了後、思い思いの感想を話し合ってみませんか。

日時：2015 年 4 月 4 日(土) 12:50～17:00 開場 12:30

会場：新潟市中央公民館(クロスパルにいがた)

4 階映像ホール

定員：80 名 申込不要 参加費：無料

問合せ：NPO 法人新潟水辺の会 (TEL：025-264-3191)

○志民委員会 N・VISION プロジェクト WHAT'S NIIGATA フォーラム ACTION! ～新潟を創造する～

日時：2015 年 3 月 21 日(土) 14:00～17:00

会場：メディアシップ 2F「日報ホール」

定員：150 名 入場無料

申込：新潟市コールセンター (TEL：025-243-4894)

(申込受付開始日は未定です)

主催：志民委員会 N・Vision プロジェクト/新潟市

プログラム：アクションプラン発表・パネルディスカッション～新潟未来地図からアクションプランへ(私たちは何を妄想したのか!) ほか

書籍紹介：皆川袈裟雄著『よみがえれ! 早川堀』(新潟日報事業社、2014 年 10 月 2 日、1,500 円+税)



当会会員の皆川袈裟雄さんが『よみがえれ! 早川堀』を新潟日報事業社より上梓された。本の出版には大変なエネルギーを必要とするが、皆川さんは 80 歳を目前にそれを成し遂げられたのである。ただそれよりも、早川堀そのものを再生させるために皆川さんが費やしたエネルギーも膨大であり、ただただ敬服する。

早川堀は、新潟歴史博物館から旧小澤家住宅の導線に位置しており、昭和 39 年に埋め立てられてから、早川堀通りとしてその延長は約 650 m あった。ここを「早川堀通り道路整備事業」として再整備され、そのうち 380 m に水路が再生されたのである。

早川堀の再生には、地域住民と行政の間で徹底的な話し合いが行われた。2006 年 6 月に「早川堀通り周辺まちづくりを考える会」が発足し、『誰も置き去りにしないまちづくり』という思想のもと、水路が完成する 2014 年 3 月にまでに 333 回の勉強会が開かれている。

これに皆川さんは全部出席している。本書では、早川堀通りの住民達がどれほどのエネルギーを費やしたのか、その経過が克明に記されており、物事を実現するにはこうした過程を踏まなければならないことを教えてくれる。

ただ、皆川さんは早川堀が復元したとは書いておらず、本書の冒頭には「平成 26 年 3 月、早川堀通りに堀をイメージした水辺が完成した。」と記している。確かに、今回完成した水路は水道水を循環させているのであり、昔の早川堀とは異なると言っていい。かつての堀と異なるものを再生させて意義があるのかという問いが出されるであろう。しかし、堀が埋め立てられた後の早川堀通りの佇まいと、水路が再生されてからの佇まいを比較して、後者の方が断然良く、夕暮れのライトアップされた情緒は人をひきつけてやまないであろう。そして、この水路再生の経緯で培われた住民達の誇りと絆の強さは今後のまちづくりにとって大きな財産になるに違いない。(大熊 孝記)

編集後記：昨年の 10 月 17 日から 2 日間、「開港 5 都市景観まちづくり会議横浜大会 2014」に参加しました。

この会議は江戸時代末期から明治期に開港した 5 都市(神戸、長崎、新潟、函館、横浜)の市民団体が集い、景観まちづくりに関する交流や意見交換を行うことを目的とした大会です。1993 年から始まり、今回で 20 回目になります。新潟からは水辺の会のほか、新潟市やにいがた花絵プロジェクトなど 30 名が参加しました。

私が参加した分科会では「線(ネットワーク)と点(クロス)賑わいの連携」をテーマに、大棧橋国際旅客ターミナルから屋形船に乗り、港を回遊し、市街地を流れる大岡川を上り、さくら棧橋まで船上からの景色や食事を楽しみました。その後のまちあるきでは黄金町エリアや伊勢佐木町を視察しましたが、黄金町の旧青線地帯が今は芸術家の発表の場(店舗)になっていることが驚きでした。

5 年に一度訪れる町ですが、変わりつつある事が体感できた大会でした。2017 年は新潟大会が開催予定です。新潟ではどのくらい港街らしさが見せられるかわかりませんが、2019 年は開港 150 周年です。これから自分に何が出来るか考える機会になりました。

今年は神戸大会が 11 月 6～8 日に開催されます。興味のある方は開催近くになりましたら、神戸市のホームページをチェックしてみてください。

編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局 〒950-2264 新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員 168 人、法人会員 8 団体、賛助会員 7 人、特別会員 1 人、顧問 7 人 (2015 年 2 月 1 日現在)